

メインバンクのリスクヘッジ機能 関係的契約アプローチ

早稲田大学商学部 広田真一

要旨

企業とメインバンクの間の密接な長期的関係は、戦後の日本の金融システムの大きな特徴だといわれてきた。ただ、1980年代以降、今日までの金融環境の変化の中で、その関係は大きく変質したとも言われている。しかしその一方で、現実の企業とメインバンクの取引関係の調査によると、両者の間には今もなお密接な取引関係があることが報告されている。

そこで本稿では、メインバンクが今日においても、企業が直面する様々な財務面のリスク（資金調達リスク、倒産リスクなど）をヘッジする機能を果たしていると考え、そして、企業とメインバンクの関係を、**relational contract**（関係的契約）のアプローチを用いて経済モデルで表現し、それを分析することによって現実の理解と理論的な予測を行う。分析の結果、（1）メインバンクは企業の将来のリスク（資金調達リスク、倒産リスク）に対して暗黙の保険を提供している、（2）それは企業とメインバンクの長期的な関係によって支えられている、と理解可能なことが示される。そして、（3）このメインバンクのリスクヘッジ機能はこれまでの金融の自由化・国際化の流れの中でも（また今後のグローバル化のいっそうの進展の中でも）維持され続けた（維持され続ける）可能性がある、ことが主張される。